

サードプレイスとコミュニケーション空間のデザイン ——大阪・commons大学の事例——

渡 邊 太*

Third Places and Design of Communication Spaces: A Case Study of Commons University in Osaka

Futoshi Watanabe*

Abstract

This paper investigates the impact of spatial design on the communication style observed in third places. Third places are informal public spaces for sociability like cafés, pubs, *trattoria* and so on. Ray Oldenburg insisted that there were enormous personal and social benefits in third places for citizens.

Each third place is characterized by unique charms derived from unique communication styles. We examine the relationship between communication style and spatial design in a case study of *Commons University* in Osaka. *Commons University* is an autonomous project to have an informal public space.

Members of *Commons University* enjoy a diffused style of communication. Instead of lectures, members have a meal and alcoholic drinks while enjoying chatting and small talk. We demonstrate that the spatial design including the size of the space, population density, seats placement, and the food and drink service condition the style of communication.

キーワード

サードプレイス、コミュニケーション、空間、デザイン、カフェ、社交

I はじめに

カフェはコーヒーを飲み、あるいは軽食をとってくつろぐ場である。それだけでなく、なじみの喫茶店となれば店主も交えて常連どうしで会話を楽しみ、社交の空間としても機能する。スポーツ新聞をまわし読み、ラジオから流れてくるニュースに適当に突っ込みを

*わたなべ ふとし：大阪国際大学人間科学部講師〈2017.7.3受理〉

入れる。まじめな話からふざけた話まで、雑談の話題はさまざまである。

社会学者R. Oldenburgは、「第一の場所」である家庭と「第二の場所」である職場のいずれとも異なる社交の場を「サードプレイス」(third place=第三の場所)として位置づけ、そこでのコミュニケーションが気晴らしとして楽しいだけでなく、社会的信頼の構築に寄与し、民主主義の基盤としても重要であることを強調した⁽¹⁾。

Oldenburgは、家庭と職場の往復に終始する現代アメリカ社会の生活様式を批判的にとらえる。サードプレイスなき生活においては、未知なる他者との出会いの機会が失われ、生活は私的に閉ざされる。都心の職場と郊外住宅地の家庭をダイレクトに結ぶモータリゼーションの進展は、街中の徒歩圏内のサードプレイスに対して壊滅的に作用した。

アメリカ人の生活様式は、物欲が満たされ、快適さや楽しさを追い求めているにもかかわらず、退屈、孤独、疎外感、値段の高さに悩まされている。アメリカはさまざまな面で進歩を遂げたが、インフォーマルな公共生活の領域では地歩を失い、そして今も失い続けている。⁽²⁾

Oldenburgには、カフェや居酒屋、ソーダ売店前での社交のコミュニケーションが失われつつあることへの切迫した危機意識がある。一方で近年、哲学カフェをはじめとしてカフェを社交の場として活用する営みが増殖しつつあり、社交のコミュニケーションへの注目が集まってもいる。個人化と階級的分断が進行する後期近代社会のなかで、各自の属性を括弧にくることで成り立つ社交のコミュニケーションに、個人化を超えた新たな共同性の期待がかけられる。社会的動物としての人間は、いまなお社交の場へのニーズを持ちつづけているようである。

ところで、サードプレイスはそれぞれ独特の雰囲気をもっている。アルコールを提供する場と提供しない場では、そこできり広げられるコミュニケーションのノリも異なる。大人数を収容できる広い空間か、少人数しか入れない狭い空間かによっても社交の場の雰囲気は変わってくるだろう。空間のデザインは、サードプレイスにおける社交のノリを条件づける。

ノリとは何か。音楽社会学者の小川博司によれば、ノリとは内的な時間の流れへの参加あるいはまきこまれる体験としてとらえられる。A. Shutzのチューニング・イン概念が示すように、個体はノリに乗る体験において、個体を超越した何モノかの流れに入るのである⁽³⁾。そして、チューニング・インする体験は音楽にかぎらず、あらゆるコミュニケーションの基底にはたらく。ここでは、社交の空間という場がそのなかでのコミュニケーションにひとつの流れをもたらし働きに注目したい。

コミュニケーションのノリは、それぞれの社交の空間の特性に応じて多種多様である。チューニングがあう空間もあればあわない空間もある。社交の空間にはそれぞれ独特のコミュニケーションのノリがあり、そのノリにあってチューニング・インできる人は参加しやすいし、ノリがあわなければ去っていく。ひとつの空間があらゆるコミュニケーションの様式をカバーすることはできず、集まるひとつひとつの属性や空間の特性に応じて各空間は

固有のコミュニケーション様式を発展させる。

本稿では、サードプレイスにおける社交のコミュニケーションの特徴について、空間のデザインとの関連で考察したい。社交の場で生起するコミュニケーションのスタイルは、空間構成と集まるひとびとのノリに応じて多様に異なる。本稿では、大阪府高槻市のカフェコモンズの事例からサードプレイスと空間のデザインの関係について検討する。

Ⅱ サードプレイス

1 サードプレイスの特徴

Oldenburgによれば、豊かな社交生活を実現するサードプレイスは個人的にも社会的にも役立つものであり、健全な社会生活のために不可欠である。個人にとっては、職場で会うよりもはるかに多種多様なひとびとと出会える点で、サードプレイスは魅力的である。そこでのおもな活動は会話を楽しむことであり、コミュニケーションの欲望を充たしてくれる。サードプレイスの常連になれば、いつでも仲間たちに会いに行き、ひとときのくつろぎを享受することができる。

サードプレイスに定期的に通う人や、そこで社交を大切にする人には、かけがえない恩恵が与えられる。誰もが平等に扱われ、何よりも会話が尊重され、確実に友だちと会えて、まとまりがゆるやかで、いつも遊び心に満ちている——そのすべてが合わさって、サードプレイスならではの経験ができるわけだ。⁽⁴⁾

サードプレイスは個人の心理的健康にとって有益であるばかりでなく、コミュニティの活力を高めるためにも役立つ。Oldenburgによれば、「こうした場所は、あらゆる人を受け入れて地元密着であるかぎりにおいて、最もコミュニティのためになる」⁽⁵⁾。常連のたまり場であるとともに、はじめて出会った他人とも気軽に会話できる雰囲気をもつサードプレイスは豊かな社交生活に不可欠であり、社交のコミュニケーションを通じて未知なる他者への信頼を醸成する。

Oldenburgはサードプレイスの一般的な特徴として、以下の点をあげている。①中立の領域であること、②ひとを平等にする、③会話がおもな活動であること、④いつでも利用しやすいこと、⑤常連が常駐していること、⑥飾り気なく目立たない外観、⑦遊び心にみちた雰囲気、⑧ホームとしての居心地のよさ。

このようなサードプレイスは、かつてのアメリカ社会ではどこでも小さなコミュニティのなかに見出すことができたが、モータリゼーションの進展にともなう社会生活の変化によって失われつつあることにOldenburgは危機感を抱き、サードプレイスの魅力を伝える著書の執筆を決意したという⁽⁶⁾。

2 都市と第三空間

サードプレイスの概念を明確化するために、都市社会学の「第三空間」概念との関係を

検討しよう。磯村英一によれば、都市の人間は、第一空間としての家庭（住居）、第二空間としての職場、そして第一の空間とも第二の空間とも異なる第三空間という三つの空間を生きている。第三空間は、固定した身分、役割から解放された自由があり、誰もが無名の大衆として娯楽や余暇を楽しむ空間である。

磯村は、第三空間が地縁・血縁・社縁のしがらみから解放されている点を強調する。

第三の生活空間、それは第一、第二の空間からは全く異なったものである。家庭が血縁や地縁のきづな、職場が上司や同僚の利害につながって長い時間的経過と体制的規制のもとでがんじがらめになっているのに反し、ここは極めて瞬間的であり非組織的につくられる空間である。匿名であり、身分からは解放され、ただ金銭という条件がかなえば、誰でも平等感を味わうことのできる空間である。生活関係的にいって、たとえ動けないような環境にあるものでも、身分関係にとらわれなければ自由に参加できる空間である。この空間の存在こそ、人間にとって、都市を魅力あるものとするものである。⁽⁷⁾

磯村によれば第三空間には、盛り場を典型とする積極的な場になるものと、移動のための交通機関のように消極的な場になるものが共に含まれる。磯村は人間が動くことによる都市のメタボリズム（新陳代謝）を強調し、「都市はそこに住む人間を毎日の生活のなかで、どこかに動かすことによってはじめてその価値を生んでゆく」⁽⁸⁾という。多数の人間が同時刻に一箇所に集まることによって「高度の集積の効果、都市エネルギー」⁽⁹⁾が生み出されるからである。動く人間のリズムが都市のメタボリズムを構成する。

したがって、第三空間も都市生活の動態のなかで把握される。磯村は、ニューヨークの中心地マンハッタンの高層ビルに住み、同じビルのオフィスに勤めていた友人のエピソードを紹介している。かれは交通渋滞を避けるためオフィスの上層階に引越したのだが、最初は便利で快適さを感じていたのに、数ヶ月たつと何だか疲労を多く感じるようになったという。磯村は、「家庭から職場までの空間は、いわば職場の勤務にそなえてのウォーミング・アップのための時間であり、空間だったのである。それが同じ建物に入ることによって、このウォーミング・アップという空間的感觉がなくなってしまった」⁽¹⁰⁾と指摘する。

第三空間には単なる移動の空間も、都市生活のリズムをつくる上で重要な役割を担っている。第三空間は、それゆえサードプレイスよりも広い概念である。第三空間のうち、社交の空間としての条件をみたした場がサードプレイスにあたる⁽¹¹⁾。

3 サードプレイスと公共性

Oldenburgのサードプレイス論が興味深いのは、「インフォーマルな公共生活」(informal public life) という独特の表現でサードプレイスを特徴づけたところである。一般に、「公共的 (パブリック)」は「公式 (フォーマル)」を連想させ、「私的 (プライベート)」は「非公式」(インフォーマル) を連想させるが、Oldenburgはパブリックとイン

フォーマルとを接続させる。インフォーマルには、「くつろいだ」「普段着の」というニュアンスがあり、ともすれば硬い印象を与えがちなパブリックという概念をより気楽で軽いニュアンスに近づけて把握できる効果がある。

空間の特性を図式化すると、公・私 (public/private) の軸と公式・非公式 (formal/informal) の軸を交差させて得られる4つの類型としてあらわされる (表1)。公・公式の場は、たとえば公共施設である。私・非公式の場は、私的空間としての自宅のなかのくつろぎの場としての居間である。公共の空間でありつつインフォーマルなサードプレイスに対して、私的な空間でありながらフォーマルな場はたとえば客間 (応接間) にあたる。

表1 空間の特性

	public	private
formal	公共施設	客間
informal	サードプレイス	居間

パブリックに開かれていることとインフォーマルに適度に閉ざされていることの絶妙な配分がサードプレイスの肝である。サードプレイスは、開かれた場である点で公共的であるとともに、気楽にくつろげる場でもある。サードプレイスがコーヒーや酒をはじめとする飲食を提供する場であるのは、共同の飲食がインフォーマルで気楽な雰囲気と適度にリラックスした気分をつくる上で有効な装置だからである。

J. Habermasは、近代民主主義の成立においてカフェが担った役割を強調した。ひとびとが集まり、新聞を読んで議論した18世紀英国のコーヒーハウスやフランスのサロンは、社会的地位を括弧に括った開かれた討議の場として私人たちの持続的討論を可能にし、政治的公共圏を実現した。だが、後に市場の原則が侵入し、論議する公衆は文化の消費者へと転化してしまう。そうになると、文化の消費が公共の議論に取って代わられる⁽¹²⁾。自由な議論という社会的行為に代わって、消費という個人的行為が台頭すると、ひとびとは個人的利害を優先する私的生活に閉じることになる。

R. Williamsは、20世紀に登場した消費者という新たな人間像が孤立した個人の姿として思い浮かべられることを指摘した⁽¹³⁾。大衆 (masses) として規模は大きいものの、その行動においては私的な営みに終始するという点で、消費者は孤立した個人像を前提とする。消費文化の台頭とともに、社交のコミュニケーションは失われる。現実の空間においては、街角の喫茶店が閉店し新しく建てられたショッピングモールのなかにグローバルなコーヒーショップ・チェーン店が進出するおなじみの光景としてあらわれる。

Oldenburgもサードプレイスが民主主義の実効性にかかわる点を指摘し、開かれた社会関係をつくる公共空間としての機能についても論じている。サードプレイスは、事情通の常連が政治的な話題について新しい情報をもたらすだけでなく、集団的な場で質問し、議論を通じて考えを深め、意見をまとめる機会を提供することで、草の根からの民主主義を活性化させる。

とはいえ、カフェがあるだけでは、豊かな社交が実現するわけではない。消費文化を代表するグローバルなコーヒーショップ・チェーンはどここの街にもあり、コーヒーを飲む客でにぎわっているが、必ずしも社交の場となっているわけではない。ジェントリフィケーションによって洒脱に飾られた清潔な都市空間でカフェとしてイメージされるのは、むしろこうしたグローバルなコーヒーショップであるだろう⁽¹⁴⁾。カフェがあればよいわけではなく、問題はそこでどのようなコミュニケーションがおこなわれているかである。

カフェをコミュニケーションの場として使用する試みとして、哲学カフェをはじめとするさまざまな小さな文化イベントが各地で催されている⁽¹⁵⁾。それらの試みは、消費文化が発展し個人化が強まるなかで、ローカルな社交の場をつくろうとする動きとしての意味をもつ。つぎに私も事務局としてかかわるコモنز大学の事例を紹介し、サードプレイスのコミュニケーションを具体的に検討する。

Ⅲ コモンズ大学の事例

1 コモンズ大学

大阪の郊外住宅地である高槻市にあるカフェコモنزは、JR摂津富田駅・阪急富田駅近くの雑居ビルの5階を借りて2005年に開店した。厨房内には石窯が設置され、ピッツアをはじめ石窯料理が楽しめる。高槻市は大阪と京都の中間に位置する郊外住宅地であるとともに、解放教育、市民運動、社会運動も盛んな地域である。カフェコモنزを運営するのは、ひきこもり活動にかかわるNPO法人日本スローワーク協会である。スローワーク協会は、「旧来の競争原理と自助自立によるファースト（より早く、より大きく、より多く）な価値観に替わる新しい生き方・働き方を提唱し実践すること」⁽¹⁶⁾をめざし、資本に包摂される賃労働とは異なる、働き方のオルタナティブに取り組んでいる。

スローワーク協会は、新しい価値や新しい働き方を考え、つくりだすための場をめざしてカフェコモنزを開店した。カフェの運営は当初から試行錯誤の連続で、運営の方式も度々変わったが、2010年からは就労継続支援A型事業所（障害者自立支援法）として平日昼の営業をおこない、主に精神障害者として認定されたひとたちとひきこもりにかかわるひとたちが共に働く場としてリスタートした（2015年にはB型事業所へ移行）。夜および土日には主催事業のイベントや勉強会、貸しスペースとして利用されている。

毎週金曜日の夜、カフェコモنزでコモنز大学という集まりが開かれている。コモنز大学は、ひきこもり訪問活動者、協同組合運動の活動家、社会学の研究者らが集まり、2009年5月に開始された⁽¹⁷⁾。当初は、2、3名で集まり、ごはんを食べながら雑談をするだけだったが、つづけているうちに徐々に参加者は増え、時々訪問する参加者は10数名程度、毎回の参加者は5、6名程度の集まりになっている。

金曜日の夜7時頃、三々五々ひとが集まり始める。カフェコモنزの昼営業は午後5時までなので、昼営業のスタッフでコモنز大学に参加するひとは、そのままコモنز大学が始まるまでのんびりと待ったり、仕事をしたりしている。コモنز大学は一応、午後7時開始としているが、7時にベルが鳴って始まるというわけではなく、開始の合図もない

ままなんとなくひとが集まった頃にいつのまにか始まっている。「学食」と呼ばれる食事が提供され、ビールや焼酎を飲みながら雑談にふける。時々をはじめに勉強する講座も開かれるが、ほとんどの場合は雑談に終始している。飲食代はすべてカンパ制である。

飲食をカンパで提供することには、コモنز大学の思想が込められている。「学食」と呼ばれる食事、ビール、日本酒、焼酎などのアルコール類も、全部ひっくるめてカンパで支払ってもらっている。カンパだといくら支払えばいいのかとまどう参加者も少なくないが、そのとまどいこそが大事だと思っている。カンパ制にすると、カフェという一応は商売の場が場としての性格を変化させ、何だかよくわからない場所に変異する。「オープンキッチン」と称して、来たひと誰でも厨房に出入り自由で、皿洗いをすることもできる。モノやサービスにあらかじめ決められた値段がついていないことにより、富が商品の集積としてあらわれる資本主義経済を根本のところから実感的に考え直す実験として、カンパ制がつづけられている。

参加者の顔ぶれは毎回異なる。主催者の他には、カフェコモنزで働くスタッフ、NPOスタッフ、研究者、学生、フリーター、失業者、市民運動や社会運動の活動家、近隣住民、ひきこもり状態から出てきた青年たち等である。どちらかという、正社員ではないかたちで働いているひとが目立つ。近所には、ひきこもり経験をもつ青年たちの共同生活寮があり、寮生たちは金曜日の夜はカフェコモنزで夕食をとることになっている。寮生のなかには、カフェコモنزで食事をして、コモنز大学には加わずにすぐに帰るひともしばしば、そのままコモنز大学に参加して夜遅くまで話し込んでいくひともある。

2 活動の内容

コモنز大学は当初はじめに勉強することを目的としていたこともあり、時々ゲストを招いての講演会を開くこともある。また、開始した当初は気力と体力ともに充実していたこともあって、音楽イベントなどにも積極的に取り組んでいた。だが、日々の生活に追われるなかでしだいにイベントを開く余力が衰退していった。

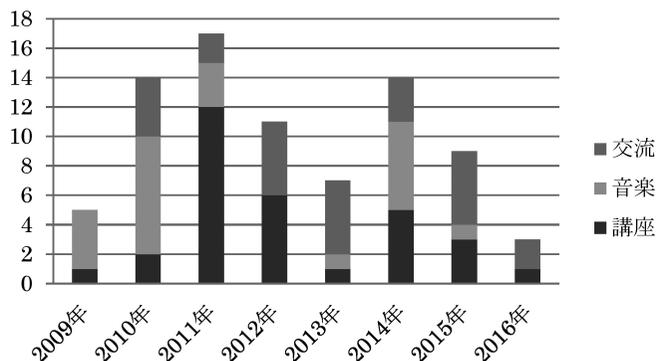


図1 コモンズ大学のイベント実績

イベント開催数を見ると活動の波が感じられる（図1）。最初の2年は客を呼ぶために積極的に音楽イベントを開催した。2011年には東日本大震災と原発事故を受けてまじめに勉強する必要に駆られて連続講座を開催し、大阪大学、京都大学の研究プロジェクトとも連携した。2012年、2013年に息切れするが、2014年には他団体との協働を得て一時的に再活性化するも、その後再び停滞傾向がみられる。

活動の盛衰には事務局の余力が大きくかかわっている。事務局を担うのは私の他に、カフェcommonsを運営するスロワーク協会のメンバー2名だが、それぞれ多忙である。2011年の活発な活動は事務局の一員が失業中で相対的に時間があったことにもよる。2012年に再就職すると余力がなくなり活動停滞、そのなかで他の活動とのネットワークが再活性化に寄与したが、長続きはしなかった（巻末資料を参照）。

こうしたイベント行事をのぞくと、ふだんのcommons大学の主たる活動は、先に述べたように雑談に終始する。雑談の主題はさまざまであるが、カフェcommonsがニートやひきこもりにかかわる活動をしていることから、働くことや仕事をめぐる話は、比較的人気のあるトピックである。仕事をめぐる話といっても、明るく活発な異業種交流会的な雰囲気ではあり得ず、働くことにつまずいている話や、働くのが面倒くさいといった話が主である。正しいか間違っているか、という真偽を突き詰めるコミュニケーションではなく、好き嫌いをいいあう感情のコミュニケーションがどちらかという優勢になる傾向がある。

commons大学の雑談は、散漫な雰囲気を特徴とする。全体で一つの話題を共有することもあるが、たいていはテーブル毎に異なる話題で雑談し、散漫な感じでいくつかの集まりがひとつの場をゆるやかに共有している感じである。声を大きくして話すことが苦手なひとが多いせいかもしれない。ごはんを食べにきて雑談にはあまり参加しないひともある。どちらかといえば話し下手で非社会的で人見知りちなひとたちが集まっている印象がある。

IV 空間のデザインとコミュニケーション

1 空間と共同性

李珍景は共同性の現勢化に際しての空間構成の意味を強調し、コミュニケーションと空間の関係を論じている⁽¹⁸⁾。李珍景は、韓国ソウルで非正規の研究者たちが自律的に研究しながら生活できる場としての研究コミュニティの実験を十数年つづけてきた⁽¹⁹⁾。研究コミュニティでは、贈与にもとづくコミュニティ的な関係性を自律的な空間において稼働させ、共に考える営みとしての研究実践がめざされている。李珍景のコミュニティ主義によれば、存在者は本来、共同的に在る。身体は無数のバクテリアと共にあり、人間という崇高な存在者が屹立しているわけではない。存在が共同性のなかで在るかぎり、つねに新たなコミュニティを創造できるし、試みることをやめられない。李珍景はコミュニティ的存在の共同性を日常的な実践の場のなかに実現すべく、コミュニティの実験に取り組んでいる⁽²⁰⁾。

李珍景によれば、「空間は潜在的なコミュニティ的關係を現勢化し、特定の形態で「存在させる」場を提供すると言えらるう⁽²¹⁾。自由な個人たち相互の贈与による自発的連合

としてのコミュニティはつねにすでに潜在的に存在するが、現勢化するには空間が必要である。いかえると、空間はコミュニティ的關係を産出する能力を秘めている。実際、空間を共有するだけでコミュニティ的關係がにじみ出てくるのは日常的経験でもある。

単に同じ空間を使用するというだけで相互間に関心や愛情が生まれ、互いに理解する幅が広くなり、そのため何かに共感したり共同活動をしたりする可能性が高まるということ、よく知られていることだ。⁽²²⁾

李珍景は自らの研究コミュニティの実践を題材として、コミュニティ空間の条件を検討している。研究という営みは、読書や執筆など個人的な活動と、雑談から集中討議まで幅のある議論という共同の活動を共に含む。研究成果は署名が付された業績として個人に帰されるが、そこに至るまでにはかならず共同の営みが過ごされている。研究コミュニティは、研究という行為を近代的な個人に閉ざされたものとするのではなく、共同の実践としての側面を強調・強化することで、生と切り離されない新たな研究実践の地平を開こうとする。

李珍景は、空間の雰囲気、外部性（外部者の参入への開かれ具合）、統合と分割（規模と分業の問題）といった点について検討を加えている。

物理的な空間は空虚な容器のようなものだが、そこでひとびとの活動とコミュニケーションがくりひろげられることによって独特の雰囲気（atmosphere）が満ちる。閑散とした空間よりもにぎわいに満ちた空間のほうがより魅力的になる。相互の贈与を促すコミュニティ的な空間をつくるためには、喜びと笑いに満ちていなければならない。その際、食事を共にすることは、空間をコミュニティにする大事な要素である。共に飲食を楽しむことは、共同体を起動するための人類の原初的な方法である⁽²³⁾。

コミュニティ的な空間は、仲間内での共同性の強度を高めると共に、外部者に対してもつねに開かれていることが求められる。外部者が容易に入ってきて交わることのできる「外部性係数」を高めるための空間の用法として、李珍景は「痕跡を残さない」という原則をかかげる。一部のひとたちが独占する閉鎖的で領土化された空間になると、コミュニティ空間は閉塞する。特定の座席が常連の「指定席」として領土化されると、他の新参者は締め出されたように感じる。そうしないためにも、できるだけ痕跡を残さずに空間を利用することが望ましい。不必要な物が空間のなかに無造作に置かれはじめると、「空間が一杯になることで、重くしなくなり、他の用途に使うことが難しくなる。すなわち空間の可変性が顕著に低下する」⁽²⁴⁾。

空間内部のデザインを自由に変更できる余地を確保しておくことで、さまざまな事態への対応可能性を維持できる。決まりきった空間はいずれ堅苦しくなる。模様替えが気分を変える効果も馬鹿にはできない。空間がもつポテンシャルを最大化するためにも、空間の可変性は維持される必要がある。

空間の規模も重要である。間仕切りなどで複数の小空間に分割されている場合は、集中して勉強するなどの用途には向くが共同性の強度は弱まる。反対に分割されていないひとつの空間だと、まとまりはよいが個別の活動の強度が弱まる。研究コミュニティは、空間の

分割と統合を適切に均衡させる必要がある。また、コミュニケーションに参加する人数が増えると空間を拡大せざるをえないが、拡大が限界に達すると空間を分割する必要が生じる。空間が分割されると共同体の強度は弱まる傾向にある。

2 空間のデザイン

以上の李珍景の議論を参考にしつつ、より物質的な条件に引き寄せて具体的な空間の構成要件について考えたい。空間の可変性、外部性の度合い、共同性の強度を左右する空間のデザインはどのようなものか⁽²⁵⁾。ここでは空間を構成する諸要素を検討しよう(表2)。

表2 空間を構成する諸要素

-
- ・ 空間の大きさ
 - ・ 人口密度
 - ・ 座席の配置と可動性
 - ・ 食事の提供
 - ・ アルコールの提供
 - ・ 喫煙の可否
 - ・ アクセスの難易度
-

空間の大きさは、同一の時空間を共有できる人数を限定する。百人規模の人数を収容できる大きな空間と、数人程度しか入ることができない小さな空間では、そこで生起するコミュニケーションの雰囲気は異なるだろう。ひとつの空間に百人集まれば、にぎやかさが生まれ、空間に集団の雰囲気がひろがるが、すべてのひとがすべてのひとと相互に対面的コミュニケーションを交わすことは困難であるから、コミュニケーションにはばらつきが生まれるだろう。それに対して、数人程度の小さな空間ではにぎやかさは生まれないものの、全員どうしの間に対面的コミュニケーションが成り立ちやすい。

収容人数とともに空間が許容する人口密度も重要である。座席が固定された居酒屋と、座席をもたない立ち呑み屋では同じ大きさでも収容可能人数が異なる。一般に混雑した場合立ち飲み屋は多少の無理がきいて高い人口密度での同居を可能にする。密集感は喧騒を増し、隣の会話も聞こえやすく、群れの感じをいっそう強めるだろう。反対に座席と座席の感覚が広く余裕をもってとられたレストラン空間では、他の客との接触が回避され、落ち着いた雰囲気になりやすい。

イスや机など座席の配置も、コミュニケーションの様式を左右する要因となる。講義室のように前方に教壇があり、向かい合って座席が並んでいる場合、そこでおこなわれるコミュニケーションは講演会や講義のように、一方的に話す話者と従順に耳を傾ける聞き手という役割を固定したものになりやすい。円形やロの字型のラウンドテーブル式に机とイ

スが並んでいる場合、コミュニケーションはより水平的になる傾向がある。

イスと机が可動式であれば、そのつどの目的に応じて座席の配置をフレキシブルに設計することができ、柔軟な空間といえる。座席が造り付けで固定されている場合、空間の使用法はより限定されたものになる。

飲食の要素も重要である。コーヒーや酒、おいしい食事は、気分をくつろがせて気楽な社交の雰囲気をつくりあげるのに寄与する。どのような種類の飲食を提供するのかということも、空間の雰囲気を左右する要因となる。喫茶を主として食べ物は軽食程度に限定するのか、十分な食事を提供するのか。アルコールを提供するのかどうか。また、喫煙を可とするのかどうか。室内分煙にするのか、喫煙所を屋外に設置するのかも、社交の空間にとっては一大事である。飲食物の価格設定も重要である。客単価をどの程度に設定するかによって、集まるひとたちの階層的条件がある程度限定される。

スペースがストリートに面した一階部分にあるのと、階段やエレベータを利用して辿り着く上層階にあるのとでは、近づきやすさが異なる。段差やエレベータの有無など、バリアフリーの条件を充たしていなければ、どうしても来ることができるひとを選別することになってしまう。結果として、パブリックに開かれている度合いが減じ、その分だけ多様性に欠けることになる。

3 コモンズ大学の空間構成

コモンズ大学では、まず空間の大きさとして、収容可能な人数は30名程度である。ふだんのコモンズ大学の参加者は、10名弱で、2、3名のグループが2つか3つに分かれていることが多い。それほど大きい空間ではなく、比較的距離感は近いので、親密な雰囲気は生まれやすいといえる。

カフェコモンズのイスとテーブルは、やや重い物もあるが移動は可能である。ふだんは中心のないコモンズ大学だが、映像の上映会をするときは北側の窓にスクリーンを設置し、プロジェクタで映像を投影するので、参加者の注意を引き寄せるひとつの焦点が生まれる。

飲食に関しては、夜の7時頃から始まることもあり、お腹を空かせた参加者が多いため、最初から食事が始まり、ごはんを食べながら会話が交わされる。ごはんを食べながら話をしていると、ひとつのことに集中して話をするというよりは、よりくつろいだ雑談になりやすく、話題はつぎつぎとそれていく。さらにアルコール飲料も入るので、会話の様式はいっそう雑然とし、まじめな話のなかにしょっちゅう冗談やくだらない話が差し込まれていくことになる。

喫煙については、以前は屋内喫煙可で、ときには煙が空間を充たすこともあったが、いまは屋外の階段踊り場を喫煙所として、カフェの内部は禁煙となっている。喫煙スペースでは、喫煙者のコミュニティが自ずと生まれる。喫煙のための一時的な退避スペースでは、表舞台で話されている内容についての注釈が施され、独自の論評がおこなわれる。カフェの空間内をメインステージとすると、喫煙所は一時的なサブステージないしはバックステージとなる。カフェコモンズの場合、トイレも室外の階段側にあるので喫煙所に近

く、非喫煙者もトイレ利用後にしばらく喫煙スペースで立ち話をしていくこともよくある。空間の焦点を複数化する点で喫煙スペースは重要である。

カフェコモンズの空間デザインは、相対的に散漫で冗長なコミュニケーションをもたらしやすい。公開講座や上映会などの企画のときをのぞけば、ふだんのコモンズ大学では基本的に全体で何かを共有して議論することはおこなわれない。いくつかのテーブルに分かれていて全体の場というものは成り立たず、ときおりひとが行き来する。議論しているテーブルもあれば、関係なくごはんを食べているテーブルもあり、ときに交じりあうこともあれば交わらないまま時間が過ぎていくこともある。

全体でまとまるときもごくたまにあるけれど、多くの場合は散漫な感じで、いくつかの集まりがひとつの場をゆるやかに共有している。議論（雑談）に参加してもいいし、べつに参加しなくてもいい。積極的に話の輪には加わってなくても、横でなんとなく聞いていという消極的な参加の仕方でもできる。そういう散漫さがコモンズ大学の特徴といえる⁽²⁶⁾。

アクセスの難易度については、カフェコモンズは駅前徒歩3分程度という点では訪れやすいが雑居ビルの5階に位置し、入口がややわかりにくく知っているひとでないと訪れにくい。アクセスのわかりにくさは、ある程度、来るひとを選別する機能も担う。新参者には入りにくく、常連には隠れ家的に居心地がよくなりやすい。

また、雑居ビルには2階から5階まではエレベータが設置されているが、1階から2階までは階段でしかアクセスできないため、車椅子利用者にとってはバリアフルである。移動の補助は申し出ることができるとしても、障壁が取り除かれていないことは開かれ具合という点では問題である。このことについては何度か議論になったものの解決には至っていない。

カフェコモンズの空間デザインによって促されるコミュニケーションの散漫さは、社交を苦手とするひとたちにとっても、社交への参加を強要されずにすむ点でその場に居やすくなる条件となっている。すぐ近くで社交のコミュニケーションがおこなわれていて、それに参加してもよいし参加しなくてもよくて、なんとなく横で様子をうかがっているような消極的な参加の仕方でも許容されている。

なんとなく気にしていると誰かが声をかけることもあれば、そのままなんとなくずっと横でいるだけのこともある。コモンズ大学では、ひとが集まっている場のなかで、能動的にコミュニケーションに参加することなくただぼんやりと座っていることが違和感なくおこなわれやすい雰囲気を感じられる。

4 空間と共同性

社交という言葉は華やいだ印象を与えるが、コモンズ大学では相対的に地味な社交のコミュニケーションが持続されている。社会的な関係性をつくる形式に注目したG. Simmelは社会化の遊戯形式として社交のコミュニケーションをとらえた⁽²⁷⁾。確かに社交のコミュニケーションは楽しい。だが、人見知り傾向をもつひとやコミュニケーションを苦手とすることを自認するひとたちにとっては、往々にして社交を遊びとして楽しめるほどの

余裕をもつことが困難だ⁽²⁸⁾。コモンズ大学のように参加と非参加の中間段階、あるいは消極的な参加を許容する場においては、社交を苦手とするひとたちもうっかり社交のコミュニケーションにまきこまれる。他者と近接するコミュニケーションの場に身を置くことは、身体的にはすでにコミュニケーションにまきこまれているのである。

E. Goffmanは公共空間の体的相互作用を分析する際に、「焦点の定まった相互作用」と「焦点の定まらない相互作用」とを区別した。「焦点の定まった相互作用」とは、「人びとが近接して、話を交互にしながら注意を単一の焦点に維持しようとはっきりと協力し合う場合に起こる相互作用」を指す。それに対して、「焦点の定まらない相互作用」は、「その場にいる別の人が自分の視野に入る時に、その人を一瞬ちらりと見て、その人に関する情報を集める場合に起こるコミュニケーション」を指し示す⁽²⁹⁾。「焦点の定まらない相互作用」は、「焦点の定まった相互作用」が始まる前段階であり、相互作用は潜勢的でありながらいつでも現勢化できる状態にある。その時点でコミュニケーションはすでに作動しているのである。

コモンズ大学は「焦点の定まらない相互作用」が支配的な空間であり、そこから「焦点の定まった相互作用」が始まることもあれば、始まらないこともある。サードプレイスにはつねにコミュニケーションが潜在しているのであり、現勢化しなくともコミュニケーションはつねに準備状態にある。また、場はつねに複数の多焦点的でもあり、ひとつのノリが場の全体を支配することがないこともまた、コミュニケーションの潜在性を促すことになっている。

空間は空虚な器ではない。空間のデザインは、空間において営まれるコミュニティ的な関係の構成要素であり、そのなかで実践されるコミュニケーションをかたちづくる力を秘めている。コミュニティに生起するコミュニケーションは空間から切り離せず、空間の雰囲気はそのうちにコミュニケーションを内在させているのである。

一般に、コミュニティの構成要素は複数の人間、または人と人との結合であると考えられる。だが、李珍景はそのような人間中心主義的な共同体論を批判し、ヒト以外のあらゆる要素も共同体をなしていると指摘する⁽³⁰⁾。たとえば農村共同体の構成要素は農民たちだけでない。牛、馬、豚、羊などの動物、稲や芋をはじめとする作物・植物、さらには害虫や土壌中の微生物までもが共同体の構成要素をなしている。当然、地質や地形など無生物的なものも共同体をかたちづくる重要な要素である。どのような空間であるかということが、コミュニケーションの共同性に影響しないはずがないのである。

V おわりに

サードプレイスにおけるコミュニケーションのノリは、空間のデザインによって影響される。集中的な討議のコミュニケーションと散漫な雑談のコミュニケーションでは、適した空間のデザインが異なる。コモンズ大学は当初、集中してまじめに勉強する場をめざしていたが、空間のデザインが適さず、結果的に散漫な雑談のコミュニケーションの場になっていまに至っている。もっとも、事務局の余力や集まるひとたちのパーソナリティが

らすると、散漫な場だからこそつづいているようにも思える。結果的につじつまが合っているのだろう。

サードプレイスを運営する側からすると、たいていの場合、空間のデザインは統制したくても完全にはしきれない。潤沢な資金があればできるかもしれないが、そういうことは減多にない。基本的には手持ちの札で勝負するしかない。空間デザインを一新するよりは、空間デザインに応じて生まれるノリを最大限に活かすかたちで、サードプレイスのポテンシャルを高めることが現実的かもしれない。

コモنز大学が始まったのは、カフェコモنزが閉店の危機を迎えた時期だった。長く勤めた店長の退職が決まり、その後どうするか決まらぬまま運営するNPO法人がカフェの家賃を払いつづけるなかで、ひとが集まる場をつくる活動としてコモنز大学の試みが始められた。当初はよく自分たちの境遇を指し示すために「ヤドカリ」という表現が用いられた。そもそもコモنز大学のために用意されたのではない場所を借りて、「他人のまわしで相撲をとる」「他人の親のすねをかじる」的にヤドカリ事業としてはじまった。

散漫なコミュニケーションがコモنز大学の特徴になったのには、部分的にはヤドカリした空間のデザインによるところも大きい。成り行きでいまの状態に至っている。だが、成り行きでそうになってしまうという運動性を積極的に肯定したいという思いもあった。コモنز大学という共同空間の核心に、いわば能動的な受動性を据えることを試みたのである。

コモنز大学は誰にとってもなじみやすい空間かどうかといわれると、安易に「そうです」とはいいがたい。コモنز大学でのコミュニケーションが様式化されていないために、そのつどイチから手探りでコミュニケーションするしかない。誰かが場をリードするわけでもなく、毎回参加する常連的なひとたちでさえそのつどはじめての参加であるかのように不慣れなそぶりで、私自身もこの場でどうふるまうべきか毎回とまどうほどである。ある参加者は「居心地の悪さにだんだんなじんでくる」といった。だれにとっても居心地のおさまりがよくないがゆえに、常連も一見客も対等な立場で、手探りのコミュニケーションにまきこまれる。

もっとも、常連的な参加者はいるものの、コモنز大学に集まるメンバーは固定的ではなく、それなりに入れ替わりつづけている。常連化するメンバーには、一定の参加パターンが見られる。何かのきっかけでコモنز大学に参加し、それからほぼ毎回（あるいは隔週くらいの頻度で）参加するようになる。そして連続的な参加が数ヶ月つづいた後、あるとき参加が途絶え、しばらく足が遠のくが、やがて以前ほど頻繁ではないがときおりは顔を出すくらいになるというパターンである。

参加者はそのつど異なるし、一定の期間をサイクルとして入れ替わってもいいが、案外ノリはかわらず、ひとが集まる場じたいはつづく。集まりが長期的に持続すれば、コミュニケーションのノリは空間に定着する。いまのコモنز大学のノリである散漫なコミュニケーションは、空間デザインの助けもあって、気楽である分、持続するのにそれほどの労力を費やさずに済んでいる。

【追記】本稿は、第85回日本社会学会大会（札幌学院大学）一般研究報告「第三の場所」と社交のコミュニケーション」および第89回日本社会学会大会（九州大学）一般研究報告「第三の場所」とネットワークのコンフリクト」の内容をもとに大幅に加筆修正したものである。

註

- (1) R. Oldenburg, *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Marlowe & Company, 1997. (忠平美幸訳『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房、2013年)
- (2) 同書、p.55. 現代アメリカ社会を批判的にとらえているとはいえ、オルデンバーグの視点は徹底して中産階級の価値に浸っているように思える。これに対して、「第一の場所」である家庭も「第二の場所」である職場も不安定な階級・階層にとってこそ、「第三の場所」が重要になるという議論も成り立つはずである。
- (3) 小川博司、『音楽する社会』勁草書房、1988年、pp.79-80. Schutz, A., *Collective Papers, I: The Problem of Social Reality, Part I, Part II*, Amsterdam: Nijhoff, 1962. (渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題（I）』マルジュ社、1983年)
- (4) Oldenburg, 前掲書、p.98.
- (5) 同書、p.17.
- (6) Oldenburgは執筆にあたって、報告書的な言葉遣いを避けてサードプレイスの魅力を宣伝する文体を選択したという。同書、p.7.
- (7) 磯村英一、『人間にとって都市とは何か』日本放送出版協会、1968年、p.64.
- (8) 同書、p.37.
- (9) 同書、p.38.
- (10) 同書、p.53. なお、磯村によれば、ドヤ街をはじめとする都市下層民の多くが第三空間をもたない「動けない人間」として、都市生活から疎外されている。「彼等にとって道路こそが家庭の座敷であり居間である。食事は屋台店をとることが多い。食堂といっても、毎日行きつけの場所だから、それは座敷の一隅と同じである。食事がすんだからといって、すぐドヤの寝床にもぐり込むわけにはゆかない。自然に道路というサロンで長話をするようになる。……中略……ドヤ街は、あえていうなら第一と第三の空間が混在する場所である」(同書、pp.62-63.)。
- (11) ただし、第三空間が成り立つのは都市においてであるが、サードプレイスは都市化の進展がそれほど進んでいないスモールタウンにもみられる。その意味ではサードプレイスの概念は都市空間からはみ出てもいる。第三空間は都市における消費の自由と強く結ばれた概念である。サードプレイスが非消費的空間としても成り立つかどうかは検討の余地がある主題である。
- (12) Habermas, J., *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt: Suhrkamp, 1962. (細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換（第二版）』未来社、1994年)
- (13) Williams, R., *The Long Revolution*, London: Chatto & Windus, 1961. (若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房、1983年、p.253.)
- (14) 代表的なグローバル・コーヒーショップ・チェーンであるスターバックスは経営理念に「サードプレイス」の概念をスマートに取り込んでいる。Oldenburgは、グローバルなチェーン店が「われわれが提供するのサードプレイスです！」と宣伝するがたいはいはそうならないと苦々しくコメントしている (Oldenburg, R. ed., *Celebrating the Third Place: Inspiring Stories about the "Great Good Places" at the Heart of Our Communities*, New York: Marlowe & Company, 2000, p.3)。
- (15) カフェやオルタナティブ・スペースで哲学カフェや自由大学の試みが増殖していることを、公式の大学における資本の支配の拡張と関連づけて以下で論じた。渡邊太「共に考えることについて——再編／増殖する大学の可能性」富山一郎・田沼幸子編『叢書 コンフリクトの人文学1 コンフリクトから問う——その方法論的検討』大阪大学出版会、2012年、pp.171-193.

- (16) 日本スローワーク協会「設立趣旨書」http://slowwork.org/?page_id=172 (参照 2017-3-27)
- (17) コモンズ大学の成り立ちについては、以下の第7章に詳述している。渡邊太、『愛とユーモアの社会運動論』北大路書房、2012年。
- (18) 李珍景, 구뮨주의: 공동성 평등성의존재론, Seoul: Greenbee, 2010. (今政肇訳『無謀なるものたちの共同体——コミュン主義の方へ』インパクト出版会、2017年) 第8章「コミュンの構成における〈空間-機械〉の問題」。初出は、『インパクション』173号(2010年)。
- (19) 李珍景も中心的なメンバーだった研究空間「スヌノモ」については、以下に詳しい。金友子編訳『歩きながら問う』インパクト出版会、2008年。
- (20) 「コミュニ的」「コミュン主義」は独特の言い回しである。李珍景によれば、「一般化されたコミュン主義とは、何よりもまず人間や生命はもちろん、塵のような物に至るまで、あらゆる宇宙的な規模の存在論的共同性の中で存在するのだという点で、いかなる差別もなく、「ひとつ」であることを、ひとつに括ることができることを見ようとする試みとして理解できる」(李、前掲書、p.12.)。たとえば個人(individual)もバクテリアに起源をもつ細胞の集積(衆一生)であり、農村共同体も複数のひとびと、家畜、植物、土壌中の微生物まで含む集合的個体である。その意味で、「存在するものはすべて共同体である」(同書、p.35.)。
- (21) 同書、p.322.
- (22) 同書、p.323.
- (23) 同書、pp.330-332.
- (24) 同書、p.343.
- (25) 屋外の公共空間における集まりの構造を空間デザインの点から分析した研究として、W.H. WhyteやJan Gehlらの優れた業績がある。座れる場所の配置など屋内の空間デザインにも参考になる知見があふれている。Whyte, W. H., *City: Rediscovering the Center*, New York: Doubleday, 1988. (柿本照夫訳『都市という劇場——アメリカン・シティ・ライフの再発見』日本経済新聞社、1994年) Gehl, J., *Cities for People*, Washington: Island Press, 2010. (北原理雄訳『人間の街——公共空間のデザイン』鹿島出版会、2014年)
- (26) それゆえ、まじめな講義を期待して訪れたひとは失望する。「コモンズ大学はいつ始まるのですか?」「もう始まっています……」という定番のやり取りがある。
- (27) Simmel, G., *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Berlin: Sammlung Göschen, 1917. (清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波書店、1997年)
- (28) 一般に雑談は気楽なものだが、つねにそうであるとはかぎらない。上山和樹は雑談の困難を指摘する。「たとえば「雑談を交わす関係を維持する」というのは、社会参加を難しいと感じる多くのひとにとって、困難な課題です。うまくやろうと意識すると、意識すればするほど出来なくなる。かといって(現にできないのだから)意識しないわけにもいかない——ここで途方に暮れます。ところができている皆さんは、さほど意識せず(というより意識しないから)参与を維持できており、そこに問題意識が滞留していること自体が理解できない」。上山和樹「Freezing Point」2010/02/20 <<http://d.hatenane.jp/ueyamakzk/20100220>>、2010年。
- (29) 「焦点の定まらない相互作用」においてもじつはコミュニケーションはすでに作動しているのである。Goffman, E., *Behavior in Public Places*, The Free Press of Glencoe, 1963. (丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房、1980年)
- (30) ここには人間と非人間の区別、生物と無生物の区別、人間と機械の区別はない。だからこそ李珍景はつぎのようにいう。「コミュン主義は、人間に対する人間の態度において、互いに生かし合う相生的な関係を追求することと同等に、人間でない全てのものに対して、それが「自然物」であれ「機械」であれ、新しい「共同的」関係を追求しなければならない」という。李、前掲書、pp.37-38.

文献

- Gehl, J., *Cities for People*, Washington: Island Press, 2010. (北原理雄訳『人間の街——公共空間のデザイン』鹿島出版会、2014年)

- Goffman, E., *Behavior in Public Places*, The Free Press of Glencoe, 1963. (丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房、1980年)
- Habermas, J., *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt: Suhrkamp, 1962. (細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換 (第二版)』未來社、1994年)
- 磯村英一、『人間にとって都市とは何か』日本放送出版協会、1968年。
- 金友子編訳、『歩きながら問う』インパクト出版会、2008年。
- 小川博司、『音楽する社会』勁草書房、1988年。
- Oldenburg, R., *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community 2nd edition*, New York: Marlowe & Company, 1998. (忠平美幸訳『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房、2013年)
- , ed., *Celebrating the Third Place: Inspiring Stories about the “Great Good Places” at the Heart of Our Communities*, New York: Marlowe & Company, 2000.
- Schutz, A., *Collective Papers, I: The Problem of Social Reality, Part I, Part II*, Amsterdam: Nijhoff, 1962. (渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 (I)』マルジュ社、1983年)
- Simmel, G., *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Berlin: Sammlung Göschen, 1917. (清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波書店、1997年)
- 上山和樹、『Freezing Point』2010/02/20, <<http://d.hatena.ne.jp/ueyamakzk/20100220>>、2010年。(参照2017-3-27)
- 渡邊太、『愛とユーモアの社会運動論——末期資本主義を生きるために』北大路書房、2012年。
- 、『共に考えることについて——再編／増殖する大学の可能性』富山一郎・田沼幸子編『叢書コンフリクトの人文学1 コンフリクトから問う——その方法論的検討』大阪大学出版会、2012年、pp.171-193.
- Whyte, W. H., *City: Rediscovering the Center*, New York: Doubleday, 1988. (柿本照夫訳『都市という劇場——アメリカン・シティ・ライフの再発見』日本経済新聞社、1994年)
- Williams, R., *The Long Revolution*, London: Chatto & Windus, 1961. (若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房、1983年)
- 李珍景, 구문주의: 공동성 평등성의존재론, Seoul: Greenbee, 2010. (今政肇訳『無謀なるものたちの共同体——コミュニズムの方へ』インパクト出版会、2017年)

国際研究論叢

(巻末資料)

コモンズ大学 イベント一覧

日時	タイトル	ゲスト	種別	共催・協力
2009/8/13	コモンズ小学校 音楽学級	たゆたう、Phirip (ワラビモチ愛好会)、大和川レコード、arto music lab. (mizuki)	音楽	
2009/9/5	ニートはジャズライブ	ニートはジャズ	音楽	
2009/11/15	コモンズ小学校 収穫祭	ほざきまゆみ、七色ラプレターズ	音楽	
2009/11/24	●●●、選んだわけじゃないんだぜ!	貴戸理恵、常野雄次郎	講座	
2009/12/25	石窯 vs ターンテーブル!!	DJ O+A、DJ YuRy、DJ Matsushita、石窯	音楽	
2010/2/9	ニート鍋～phaさんを囲んで～	pha	交流	
2010/2/10	ニート入門		交流	
2010/2/11	ニートのあした	ニートはジャズ	音楽	
2010/3/5	スキ焼きコモンズ	オオヤミノル	交流	
2010/4/29	コモンズ小学校 にくの日	美容、キムキムと愉快的仲間	音楽	
2010/6/12	ワインを待ちながら	清水君	音楽	
2010/7/4	コモンズ小学校 プール開き	たゆたう、mizuki、ほざきまゆみ	音楽	
2010/8/31	浴衣 de ナイト	DJ O+A、DJ YuRy	音楽	
2010/9/23	コモンズ小学校 秋分の日	七色ラプレターズ、地底紳士	音楽	
2010/10/8	コモンズ大学特別講座 サイレントテロ入門	umeten	講座	
2010/11/3	コモンズ小学校 カレーの日	地底紳士	音楽	
2010/12/4	リズムサイエンス	上野俊哉	講座	大阪大学GCOE
2010/12/17	カモコモンズ	フランス鴨	交流	
2010/12/25	コモリマス コモンズ小学校	にわとり、地底紳士	音楽	
2011/2/11	コモンズ小学校 ニートピア	ほざきまゆみ、地底紳士、びろびろ	音楽	
2011/4/1	コモンズ大学入学式		交流	
2011/4/23	コモンズ大学公開講座「震災後の社会を考える」第1回 原子力と社会	小林圭二、内海博文、濱西崇司	講座	
2011/5/10	コモンズ大学公開講座「震災後の社会を考える」第2回 震災のナショナリズム	富山一郎、石田みどり	講座	大阪大学GCOE
2011/7/1	『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』	前田年昭	講座	
2011/7/9	コモンズ大学特別講座「空間×運動のスタイル」	ナリタケイスケ	講座	大阪大学GCOE
2011/7/10	コモンズ大学公開講座「震災後の社会を考える」第3回 原発問題とフリーター	平井玄	講座	大阪大学GCOE
2011/7/17	コモンズ小学校 北摂音響	naam' quartet、DJ O+A	音楽	
2011/8/7	コモンズ大学公開講座「震災後の社会を考える」第4回 東北から考える日本	小野遼太郎	講座	
2011/8/10	ユソン歓迎会	유선 (かたつむり工房)	交流	
2011/8/26	台湾アクティビズム報告	うきき	講座	
2011/9/7	コモンズ大学@飯女の家 「漂流と定住」	安岐理加	講座	
2011/9/16	『俺俺』読書会		読書会	
2011/11/6	コモンズ大学公開講座「震災後の社会を考える」第5回 ひきこもり後の社会	上山和樹	講座	
2011/11/14	コモンズ大学@カフェビヨルコル (韓国ソウル) 「カフェとコモンズ」		講座	

カードプレイスとコミュニケーション空間のデザイン——大阪・コモンズ大学の事例——

日時	タイトル	ゲスト	種別	共催・協力
2011/12/9	橋口昌治『若者の労働運動』書評会	橋口昌治	講座	
2011/12/18	非正規研究者の現状とこれから	長松奈美江、岡本朝也	講座	
2011/12/24	コモリマス	DJ O+A	音楽	
2012/1/14	国際研究ワークショップ「空間とガバナンス」	李珍景、伊藤公雄、雷山一郎 ほか	講座	京都大学GCOE、大阪大学 GCOE、スエノモン
2012/1/15	国際研究ワークショップ「空間とガバナンス」	李珍景、伊藤公雄、雷山一郎 ほか	講座	京都大学GCOE、大阪大学 GCOE、スエノモン
2012/2/10	ニート鍋@富田駅前	国境なきナベ団	交流	
2012/2/11	ニート再入門		交流	
2012/3/17	よなおふみこのヨクバリ展	よなおふみこ	交流	
2012/3/20	『愛とユーモアの社会運動論』出版記念パーティー		交流	
2012/3/23	大学非正規労働実態調査報告会	大学非常勤職員のワークライフ バランスについての研究ユニ ット	講座	
2012/6/9	『愛とユーモアの社会運動論』書評会	umeten、上山和樹	講座	
2012/8/15	「働かないこと、非労働をめぐる」@スエノモン	李珍景、境毅ほか	講座	スエノモン
2012/8/31	いま、デモクラシーはどこにあるのか オ キュパイ運動の経験から	高祖岩三郎、酒井隆史	講座	Urban Culture Osaka
2012/12/14	コモンズ大学@NDS		交流	
2013/2/10	ニート鍋@総持寺駅前	国境なきナベ団	交流	
2013/2/22	コモンズ大学@NDS		交流	
2013/6/21	コモンズ大学@NDS		交流	
2013/8/13	にゅっと入ってきた被ばく労働	ごぼう	講座	ごぼう
2013/8/23	朝井リョウ『何者』読書会		読書会	
2013/9/11	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.1	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2013/10/4	コモンズ大学@吉田寮祭		交流	
2013/11/25	江上賢一郎さん交流会	江上賢一郎	交流	
2014/1/24	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.2	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/2/10	ニート鍋@梅田		交流	
2014/1/31	ファミ・レザさん交流会	ファミ・レザ、樋口貞幸	交流	
2014/2/14	にゃき'S NIGHT「バレンタインをぶっ飛ば せ！！ ～愛と性と労働～」	にゃき、徳丸ゆき子、 水嶋かおりん、gaymakimaki	講座	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/3/28	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.3	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/5/23	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.4	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/6/13	杉山春「ルゴ虐待」読書会	杉山春、徳丸ゆき子	講座	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/6/20	にゃき'S NIGHT「ひきこもりグレーゾーン」	にゃき、徳丸ゆき子、 セクシー吉田、石田鉄平	講座	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/7/18	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.5	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/9/19	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.6	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/11/21	ブルーハーツを聴こうぜ！！の会 vol.7	にゃき	音楽	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2014/11/28	デモのあれこれについて知恵を集める会（通 称：デモ会）第1回「なぜデモは一車線・三 列縦隊なのか（デモの編成について）」	栗田隆子	講座	デモ会

国際研究論叢

日時	タイトル	ゲスト	種別	共催・協力
2014/12/5	コモンズ大学@のびしろ		交流	のびしろ
2014/12/19	長澤靖浩 講演会 この世に投げかえされて ～臨死体験と高次脳機能障害～	長澤靖浩	講座	ゆるくすぐやるアクション イベントグループTAG
2015/2/10	「ニートの日」特別上映会『騒音の騒音』『山 谷 やられたらやりかえせ』		交流	空夢箱
2015/3/20	『ホットロード』の会		交流	
2015/5/22	からふるくらす 出張授業	榎畑敦子、川端多津子、 柳淳也	講座	からふるくらす
2015/8/1	浴衣deナイト	DJ O+Aほか	音楽	
2015/9/11	中津文化祭便乗企画「自由の空間のために」	江上賢一郎、栗原康	講座	中津文化祭
2015/10/9	ベベ長谷川さん交流会	ベベ長谷川	交流	
2015/10/16	コモンズ大学鉄道文化祭	塩見翔ほか	講座	
2015/12/25	クリスマス鍋		交流	
2016/2/10	ニート鍋@摂津富田駅前		交流	
2016/7/10	選挙バー7.10 開票速報をみんなで観よう!	安原荘一	交流	
2016/9/30	さよならニッポン 石田みどりさん送別会	石田みどり、小路まき子	講座	